

各関係機関・団体長 様

愛媛県病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について（送付）

このことについて、12月の予察情報を送付します。

病害虫発生予報（12月）

令和6年11月29日  
愛媛県

1 気象予報（高松地方气象台）

1 か月予報（令和6年11月21日発表）の解説  
向こう1か月の天候の見通し 四国地方（11月23日～12月22日）

< 1か月の平均気温・降水量・日照時間 >

	平均気温（1か月）	降水量（1か月）	日照時間（1か月）
四国地方	低30並30高40% ほぼ平年並の見込み	少40並30多30% ほぼ平年並の見込み	少30並30多40% ほぼ平年並の見込み

< 予報のポイント >

・向こう1か月の気温はほぼ平年並で、寒気の影響を受けやすい時期もあるでしょう。

2 病害虫の発生予想

かんきつ

(1) ミカンハダニ

ア 予報の内容 発生量：やや少

イ 予報の根拠

(ア) 11月中旬の定点調査では、寄生葉率、1葉当たりの雌成虫数ともにやや少の発生である。

(イ) 気象予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並の見込みとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 収穫の終了した園地では越冬密度を下げるため、マシン油乳剤（95%）を散布する。ただし、極端な樹勢低下樹や厳寒期での散布は避ける。

(イ) 越冬栽培品種では果実での発生の有無をよく確認し、果実袋などで被覆する前に防除する。

野菜

(1) 黄化えそ病（冬春きゅうり）

ア 予報の内容 発生量：やや少～並

イ 予報の根拠

(ア) 11月中旬の定点調査では、発生は抑制栽培でやや少、促成栽培では認めていない。

(イ) 11月中旬の定点調査では、媒介虫のミナミキイロアザミウマの発生は、抑制栽培ではやや多、促成栽培では平年並の発生である。

(ウ) 気象予報では気温はほぼ平年並とされており、媒介虫は現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 発病株は直ちに抜き取り、適正に処分する。ハウス栽培では発病株の早期抜き取りが重要な耕種的防除法となる。

(イ) 媒介虫の卵・蛹には薬剤の効果が劣るので、発生圃場では、発生に応じて2～3回防除を行う。

(ウ) 媒介虫は雑草等でも増殖するので、圃場内の除草を行う。

(2) ベと病（冬春きゅうり）

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 11月中旬の定点調査では、抑制栽培で平年並、促成栽培でやや多の発生である。

(イ) 気象予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並の見込みとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

- (ア) 換気を十分行い、ハウス内の多湿を防ぐ。
- (イ) 成り疲れ、肥切れは発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。
- (ウ) 老化葉や発病葉は早めに除去する。
- (エ) 発病初期の防除に重点を置き、薬液が葉裏の菌叢に十分かかるように散布する。

(3) うどんこ病 (冬春きゅうり)

ア 予報の内容 発生量：やや少

イ 予報の根拠

- (ア) 11月中旬の定点調査では、発生は抑制栽培でやや少、促成栽培では認めていない。
- (イ) 気象予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並の見込みとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

- (ア) 葉裏、葉柄まで菌叢が広がると薬剤防除が困難となるため、病勢が進展した発病葉は可能な限り除去する。
- (イ) 窒素過多を避ける。
- (ウ) 発病初期の防除に重点を置き、薬液が葉裏までかかるように散布する。

(4) 褐斑病 (冬春きゅうり)

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

- (ア) 11月中旬の定点調査では、発生は抑制栽培で平年並、促成栽培では認めていない。
- (イ) 気象予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並の見込みとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

- (ア) 換気を十分行い、ハウス内の高温多湿を防ぐ。
- (イ) 草勢低下、窒素質肥料の過多は発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。
- (ウ) 老化葉や発病葉は早めに除去する。
- (エ) 発病初期の防除に重点を置き、薬液が葉裏までかかるように散布する。

(5) うどんこ病 (冬春いちご)

ア 予報の内容 発生量：少

イ 予報の根拠

- (ア) 11月中旬の定点調査では、発病葉率は少の発生である。
- (イ) 気象予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並の見込みとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

- (ア) 伝染源の除去、通風の確保、薬剤の付着性向上のため、発病葉や古葉をできる限り除去する。
- (イ) 気温の低下とともに新しい展開葉 (発病初期は展開葉1～2枚目をよく観察する) から発病し始めるため、葉裏をよく観察し発病初期の防除に重点を置く。
- (ウ) 薬剤は、薬液が葉裏や芽の隙間にかかるように散布する。

(6) アブラムシ類 (冬春いちご)

ア 予報の内容 発生量：やや少

イ 予報の根拠

- (ア) 11月中旬の定点調査では、やや少の発生である。
- (イ) 気象予報では、気温はほぼ平年並の見込みとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

- (ア) 圃場観察により早期発見に努め、発生が見られたら早めに防除する。

(7) ハダニ類 (冬春いちご)

ア 予報の内容 発生量：やや少

イ 予報の根拠

- (ア) 11月中旬の定点調査では、やや少の発生である。
- (イ) 気象予報では、気温はほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

- (ア) 圃場観察により早期発見に努め、低密度時に防除する。
- (イ) 薬剤は、薬液が葉裏までかかるように散布する。
- (ウ) 薬剤の選択に当たっては、ミツバチや天敵カブリダニ類等への影響を考慮する。

- (エ) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一薬剤の連用を避け、気門封鎖剤を含め、系統の異なる薬剤によるローテーション使用を心掛ける。
- (8) タバココナジラミ (冬春トマト、冬春きゅうり、冬春いちご)  
 ア 予報の内容 発生量 冬春トマト：並 冬春きゅうり・冬春いちご：やや多  
 イ 予報の根拠  
 (ア) 11月中旬の定点調査では、発生は冬春トマトで平年並、冬春きゅうり、冬春いちごでやや多である。  
 (イ) 気象予報では、気温はほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。  
 ウ 防除上の注意  
 (ア) 定期的な薬剤防除を行い、葉液が葉裏までかかるように散布する。  
 (イ) 本虫は、多くの植物に寄生するため、圃場内の除草を行う。  
 (ウ) タバココナジラミが媒介するトマト黄化葉巻病の発病株は、発見次第抜き取り、適切に処分する。
- (9) ハスモンヨトウ (冬春いちご、冬春野菜全般)  
 ア 予報の内容 発生量 冬春いちご：やや多 冬春野菜全般：多  
 イ 予報の根拠  
 (ア) 11月中旬の冬春いちごの定点調査では、寄生株率はやや多、被害株率は多の発生である。  
 (イ) 性フェロモントラップによる誘殺数は7地点とも多い(病害虫防除所ホームページ掲載データを参照)。  
 (ウ) 気象予報では、気温はほぼ平年並の見込みとされており、現在の発生傾向が続くものとみられるが、気温の低下にともない露地での発生は減少してくる。  
 ウ 防除上の注意  
 (ア) 圃場観察を行い早期発見に努め、発生が見られたら早めに防除する。  
 (イ) 薬剤の選択に当たっては、ミツバチや天敵カブリダニ類等への影響を考慮する。  
 (ウ) 防除効果の低下している薬剤の事例があるため、薬剤の選定に注意する(令和6年10月4日付病害虫防除技術情報(第6号)参照)。

### 【病害虫発生予察情報】

愛媛県病害虫防除所ホームページでご覧になれます。

ホームページアドレスは、<https://www.pref.ehime.jp/site/byocyubojo/>

### 【農薬使用時の注意】

- ◎農薬の選定にあたっては、農薬取締法に基づき登録された農薬から選定しましょう。
- ◎農作物の安全性を確保するため、農薬の使用にあたっては、適用作物、使用回数、使用時期、使用濃度、使用量、使用方法等の使用基準を遵守しましょう。
- ◎病害虫等の発生を的確に把握し、適時適切な経済防除に努め、農薬や労力等の低投入を図るとともに、低毒性農薬を使用しましょう。
- ◎農薬による防除のみに頼らず、耕種的防除法、物理的防除法及び天敵導入等を積極的に取り入れた総合防除を推進しましょう。
- ◎同一薬剤の連用は耐性菌、抵抗性害虫の出現や助長をまねくので、農薬のローテーション使用を心掛けましょう。
- ◎農薬の使用にあたっては、当該散布場所の地形、当日の気象、養蚕、養蜂、その他の環境条件を考慮し、周辺環境に影響の少ない薬剤を選定するとともに、危害の未然防止や環境の保全に努め、農薬事故防止対策を徹底しましょう。
- ◎農薬を使用する際、農薬のラベルに記載された登録内容、使用上の注意事項等を遵守し、農薬の散布にあたっては、農薬の種類に応じた保護具を必ず装着しましょう。
- ◎農薬の保管管理や取り扱いに注意し、紛失、盗難等の未然防止を図りましょう。